

平成 21 年度 第 2 回大学授業研究会の報告

平成 21 年度第 2 回大学授業研究会は、10 月 8 日（水）の合同教授会終了後、MM ホールにおいて開催された。今回の授業実践事例報告会の参加者は約 100 名。進行役は FD 推進委員の赤岡仁之（情報メディア学科）が担当。

大学授業研究会は、はじめに FD 推進委員会の前原健三委員長が挨拶し、「私語のない、双方向の授業の創造的探求」を目的にした本研究会の主旨を確認した。

引き続き、日本語日本文学科の西山明美先生が書道の授業（授業形態は実習および講義）を通しての「私語がない授業のあり方」（別紙①）を、続いて情報メディア学科の福井哲夫先生がソフトウェア論の授業（授業形態は講義）を通じた「私語がない双方向の授業の実施例」（別紙②）を、最後に心理・社会福祉学科の井上雅勝先生が所属学科における「私語の風景」を主として学生の立場から考察した内容（別紙③）を、各々 15 分という持ち時間のなかで報告。その後の意見交換会では、会場の先生方と壇上の 3 人の先生方による活発な質疑応答が行われた（別紙④）。大学授業研究会の所要時間は約 1 時間 45 分〔16:10～17:55〕。



第 2 回目の大学授業研究会は、前回より多くの質問が寄せられ、出席されていた教職員の反応が大変良かったのではないと思われる。

報告者 3 名の先生がご自身の専門分野を踏まえて授業を工夫されており、学生対象に行ったオリジナルのアンケートのご報告など、多くの参加者の興味を引きつけるものだった。本研究会終了後に回収した出席者アンケートにも、「大いに参考になった」という意見が大変多く見受けられた。

また、報告者 3 名の質の高い内容とともに、授業中の私語や双方向の授業に対する教職員の関心の高さが感じられ、FD 推進委員会が提起している「私語のない、双方向の授業の創造的探求」という

問題意識が、多くの教職員に浸透し始めているように感じている。

第2回目の大学授業研究会は総じて好評であったが、出席した教職員から「研究会が予定時間よりも長かった」というお叱りも受けた。より充実した研究会運営のためには、時間のマネジメントは今後の課題だと思われる。

テーマ：私語がない授業の実施例

実施者：西山 明美 准教授（日本語日本文学科）

科目名：書道Ⅱ

(1)半年毎の指定席

1 回目の授業に、来週から学生が選んだ好きな座席を半期の指定席とする旨を話しておく。

座席表作成のため、各学生に名前を書かせる（あらかじめ表は作成済み）。

実技を伴う授業のため、当初は点呼する時間の節約の為であった。

質問する際は名前で指名できる。

私語防止のための指定席ではないが、結果的には、私語の防止にも役立っている。

現在はピグマで出席をとっているが、やはり指定席制にしている。

(2)書道は日本の文化の一つであるという認識をもたせる

書道Ⅱの受講学生は * 中学校以来書道はしていない学生

* 高校で書道を選択した学生

* 書塾に通っている（いた）学生

* 大学1年で書道Ⅰを選択した学生、という内訳である。

経験に個人差のある学生に等しく意欲を持たせる。

現代社会では、パソコンや携帯メールの普及で、文字は書くのではなく打つ時代と言われているが、書道は日本の大切な伝統文化であり、それを次世代に伝えていくことは、現代の大学教育の重要な課題だと考える。

(3)集中力が勝負の科目である

書道Ⅰでは、前期に篆書、隸書、楷書、後期に行書、草書、仮名を広く浅く学び、文字の歴史、文字の流れを把握させている。

また、書道は線が命である。力強く生き生きとした点画の集合で素晴らしい文字となるため、背筋を伸ばして姿勢を正し、口をつむって勢いのある素晴らしい線を引くことが重要であるとともに、いい作品を書き上げるためには、集中力が勝負である。

(4)電子機器の利用

(5)e-Learning の作成による書道概念の変化

書道Ⅱでは、日本の書、つまり仮名を中心に学習する。ネックとなるのは変体仮名である。その数は約 200 余音、草体化が 3 通りあるとすると 600 余字になる。仮名は日本独特の文字であり、古典に使われている仮名（変体仮名）が読めれば、書道の学習のみならず、源氏物語などの古典を原文で読むことも可能である。しかし、変体仮名の文字数は非常に多く、授業時間内に全ての文字を指導することは困難なため、反復学習が可能な動画を含む電子教材 e-Learning を活用してい

る。従来は、変体仮名一覧のプリントを配布して、テキストに掲載のページ中に出てくる変体仮名についてのみを説明していた。

電子教材使用による学習効果例は以下の通りである。

①学習時間・場所

- ・自分のペースで学習できるので分かりやすい
- ・自分の空き時間を利用して効率的な学習ができる

②反復練習

- ・一度受けた授業をもう一度見直すと理解が深まる
- ・文字の反復学習が先生の動画を見ながらできる
- ・一字ずつ書いているので学習しやすい

③運筆

- ・文字の転折（てんせつ）部がよくわかる
- ・筆遣いがわかりやすい
- ・細かい筆の動きが見られて書道を身近に感じることができる
- ・タッチペン（手書き認識ペン）を使いたい

④学習方法

- ・書道を e-Learning できることは画期的である
- ・BGMがあるのでリズムカルに学習できて楽しい
- ・工夫された新鮮な授業で長時間学習しても疲れない

⑤書道のイメージ

- ・この学習を続けると書道が上達しそうと思った
- ・書きたい文字を瞬時に選択できるので便利である

たとえば、古典の研究（関戸本古今集の場合）教材として扱う部分を実際に私が書いて見せ、次に学生自身にも書かせる。それでもわからない点を指摘させて、その部分と、その周辺を説明しながら再度、私が書いて見せる。

(6)積極的な授業の取り組み方により技術が身につく

(7)表現力を高め向学心を養う

書道といえば、従来からアナログであるという観念をもっている学生がほとんどであったため、はじめて e-Learning を導入した時の学生たちの感嘆と感激の教室の空気は、とても新鮮なものであった。私自身も書道の電子化というものに挑戦してみて、平面芸術の書道がかくも立体的に指導できるのかと、新発見であった。そして、書道をもっと学びたいとか、面白いとか、好きになった学生は書道Ⅲや、書道ゼミの受講を希望してくるようになった。

学生には常々、「皆さんの積極的な授業の取り組み方により技術が身につく」と話し、意欲を掻き立てている。すなわち、学生たちに科目に対して興味、関心を強くもたせると私語はおこらないと考える。

補足：当初、大学授業研究会のテーマとして「特色ある授業の実践例」としていたが、「私語のない授業の実践例」にて発表させていただいた。

テーマ：私語がない双方向の授業の実施例

実施者：福井 哲夫 教授（情報メディア学科）

科目名：ソフトウェア論

1. 「ソフトウェア論」の実施内容と特徴

内容レベル： 情報メディア学科 専門科目（入門レベル）

実施時期： 1 年前期 1 限

受講者： 179 人（193 人収容の教室）

授業の進め方の特徴は以下の 4 点に整理することができる。

(1) マルチメディア教材の利用

- ・スライド画像（パワーポイント）
- ・音
- ・映像
- ・インターネット上のコンテンツ
- ・応用ソフトのデモ
- ・書画カメラによる実物（集積回路、FD 等）

(2) 手を動かし、考える時間を作る

- ・記入空欄のあるプリント
- ・練習問題
- ・小テスト

(3) 双方向授業

- ・小テスト時に質問・意見を記入

この結果を後日学生にフィードバックする。リアルタイムの双方向性ではないが、学生の参加意識を高めていく。

- ・ μ Cam（電子）掲示板からの質問
- ・ μ Cam オンラインアンケート（本調査など）

紙媒体ではないことと、タイピングに慣れている学生が多いためか、アンケートに自分の意見をきちんと回答してくれる。

(4) 私語対策

基本的に下記のことを心がけているため、授業における学生の私語はない。

- ・授業のはじめに私語・飲食・携帯の注意
- ・騒ぎ（私語し）だしたら必ず注意
- ・座席指定管理型
- ・厳格な出席確認

2. 私語に関するアンケートの内容

「ソフトウェア論」に関して、「私語の多い授業と思うか（5 段階評価）」「他の受講生の受講態度（9 選択肢）」「私語で困っているか（3 段階評価）」「私語対応の良い点（12 選択肢）」「私語がしたくなる

原因（13 選択肢）」「感想・意見（自由記述）」の 6 項目を、受講学生に μ Cam でアンケートを実施した（回答は 141/178 人という高い回答率）。

その結果を要約すると、

- ・「私語の多い授業と思うか（5 段階評価）」

「全くそう思う」が 0 人、「ややそう思う」が 6 人であり、その合計は全体の 4%であり、ほとんどの学生が私語のない授業と認識している。

- ・「他の受講生の受講態度（9 選択肢）」

「特に気にならない」が全体の 62%ともっとも多く、「寝ている」「携帯電話を操作している」という回答がそれぞれ 27%、17%であり、「私語をしている」という回答は全体の 9%。それ以外の少数意見として、「化粧をしている」「許可無く途中で退出する」「飲食をしている」「授業に関係のない本を読んでいる」「内職をしている」があった。

- ・「私語で困っているか（3 段階評価）」

「困っていない」が全体の 88%であった。

- ・「私語対応の良い点（12 選択肢）」

上位の回答は、「座席指定」「記入空欄のあるプリント」「先生がときどきする雑談」「周りの雰囲気」であった。

- ・「私語がしたくなる原因（13 選択肢）」

上位の回答は、「受講人数が多いから」「特に問題はない」「授業時間の 90 分が長い」「授業がわからないから」「授業内容が面白くないから」「私語が楽しいから」であった。

- ・「感想・意見（自由記述）」

自由記述回答者は 132 人（回答者 145 人中）、その回答者の回答平均文字数は 48.5 文字、最大では 324 文字と、学生が感想・意見を熱心に回答してくれた。内容的には、好意的な感想が圧倒的に多かった。

3. アンケート結果の考察

「ソフトウェア論」の授業において、私語に対しては困っている学生は総じて少ないという結果であるが、それは私語対策がうまくいっているからと考えられる。上記のアンケート結果を参考にしながら、それらの私語対策を要約してみると下記の通りである。

- ①座席指定（支持率 63%）・・・大人数では必要・学生も納得
- ②記入空欄のあるプリント（支持率 46%）・・・手を動かすことによって集中力アップ
- ③雑談の息抜き（支持率 35%）・・・意外と聞く気にさせる
- ④周りの雰囲気（支持率 34%）・・・このためには(5)が大事
- ⑤分かる説明と関心の持てる内容（支持率 58%）・・・★最も重要
- ⑥授業中の練習問題や小テスト（支持率 34%）・・・理解する意識向上（双方向）
- ⑦講義スライドが後で自由に見られる安心感（支持率 18%）・・・聞くことに集中できる

テーマ：私語の風景

実施者：井上 雅勝 准教授（心理・社会福祉学科）

1. 報告の説明

「私語のない授業を実現するための具体的な方策を探る」という観点から、従来の授業実践例の報告という枠組みを若干変え、独自に実施した学生アンケートに基づく私語発生要因の質的分析と、これをふまえた所属学科における今後の対策方針について報告する。

2. 問題の所在

これまで、大学授業研究会で紹介されたさまざまな授業の実践例の多くは、学習意欲、知的好奇心、将来に備えた情報の獲得といった正の動機づけに働きかける方法である。こうした授業の工夫はすべての学生にとってのよい授業でもあり、私語をなくすためによい授業が行われるわけではない。私語の本質を探るには、結果としての授業の工夫から解決しようとするだけではなく、なぜ、どのように私語が発生するのかといった側面からも考えてみる必要がある。

3. 報告

(1) 私語発生要因の質的分析

学生アンケート（私語に至るまでの心的プロセスおよび理由の要約から）

① 私語が発生する教員の行動・態度

- ・ 授業に対する教員の姿勢→教員自身が講義の内容に興味をもっていない。準備不足。
- ・ 学生との接し方→私語を注意しない。注意の仕方が悪い。学生を見ていない。学生と関わりを持つとしない。
- ・ 話し方による要因→小さな声、聞き取りづらい声、メリハリの無い単調な話し方。
- ・ 授業の進め方による要因→読むだけ、書くだけ、穴埋めだけの単調な授業。

⇒学生が求めているものは、教員の独善的で空回りな熱意ややる気ではなく、心意気ではないか。

② 私語が発生するつまらない授業とは

- ・ 今、授業に参加しなければならない、という強い動機づけを学生に感じさせない授業。
- ・ 何のために今の授業があるのか、という目標を学生自身が把握・設定できない授業。

⇒教員は自分の行動の意味は学生自身で考えるものと思っているが、もはや学生は、それさえも想定することが出来ない、という前提も必要なのかもしれない。

③ 私語が発生するむずかしい授業

- ・ 1対1の記憶だけでなく、多くの情報の関係を把握しながら、「考えて」理解することが必要な複雑な内容の授業。

⇒学生は大学に入るまで「考えた経験」がほとんどない。論理的な説明を飛ばしてでも、直感的に覚えられるように工夫されすぎた授業に慣れてきた。

「考えて理解すること」に慣れていない学生は、どのように大学の授業についていけばよいのか、実は戸惑いを感じているのではないか。それが動機づけの低下、延いては私語にもつながっているのではないだろうか。つまり、本質的解決には、私語対策というだけでなく、むしろ、初期教育における大学生としての考え方・態度への変化を求めて中・長期的に解決させなければならないと思われる。

(2)後期からの学科独自の取り組み

①授業中の私語対策

目的：学生自身が社会的抑制をうまく働かせること。（負の動機付けへの働きかけ）

方法：個別に注意した学生について（各授業3回）学生証の呈示、報告書への氏名の記入。

報告書が累積した学生（1週間5回以上）に対する個別指導。

非常勤講師を含む全学科教員、学科全学生に対して周知し実施。

②個別指導の意味

私語の注意をきっかけにして、問題を抱える学生と教員とが、本気で話をする関係をつくることが真の目的である。もう一つの目的は不適応学生（学習障害・社会性障害）の発見であるが、私語の問題として浮かび上がってくるのは、稀なケースであると思われる。

③取り組みの残された問題

非常勤の先生方との共通理解をどこまで深めることが出来るか。

教員側の権威の暴走・乱用への危惧。学生に不当な圧力や苦痛を与えることになってはならない。

今後は、この取り組みの効果・問題点を観察し、修正を加えながら、来年度の初期指導体勢を整える一環にも組み入れていく予定である。

3 人の先生方の報告後に行われた意見交換会での質疑応答の内容を以下に示します

意見交換会での質疑応答は、「私語」「座席指定制」「教室のキャパなどの授業環境」に関する事柄や、大学の教育システムに対する要望などがあった。

①授業中に教員が話す雑談について

- ・どのような内容の話をするのか。
- ・雑談後の切り替えはどのようにするのか、静寂を取り戻すことは可能か。

⇒授業内容とは関係ない話は授業の前に。

授業中に挟む雑談は授業に関連した話題で計画的に話している。

②効果的な注意の仕方について

⇒早期対応、人物特定、強い口調

③座席指定について

- ・最初は静かであっても、授業回数が進むにつれて私語が増えるのではないか。
⇒座席指定だけが私語の解決策ではない。私語を誘引する条件を減らす
1つの方法にすぎない。授業内容の工夫などが必要。
- ・積極的に授業を受けたい学生（前方に座りたい学生）への配慮はどのようにしているのか。

⇒学生は概ね座席指定に肯定的である。

⇒学期の途中で席替えをしている。

④私語をしていた学生が私語をしなくなったとしても、それが他に移ることはないのか。

⇒私語をする学生は、ほぼ特定されている。他の学生に移ることはない。

⑤私語のない授業は持続するのか

⇒初期指導が重要。その際、個々の教員ではなく全体で良い授業の雰囲気を作り出すことが必要ではないか。初期指導が徹底すれば持続することは可能であると思われる。

⑥不安と私語の関係について

⇒実際には不安を感じているが、感じないように抑制しているのではないか。こちらの問いかけ、話しかけに対して排除しようとしている。この低動機づけが私語にもつながっているのではないか。

⑦受講人数と教室の収容人数について

- ・余裕の無い教室での授業は大学の授業環境として最適なのか。
- ・人数の多さと教室の狭さが私語を誘引しているのではないか

⇒ 教員の負担（コマ数）等を考えないならば、少人数授業にすることも一つの方法。

⇒ 授業による。（大人数授業であっても）一概に教室が広ければよいとは言い切れない。

⑧穴埋めについて

⇒ 単なる穴埋めだけの単純な進め方ではなく、その先の展開が必要。

⑨非常勤講師との共通理解（要望）

専任教員の間ではこのよう議論の場があるが、今後は非常勤の先生方も巻き込んだ全体的な意見交換が必要。例えば共通教育の場合、大多数が非常勤の先生方による授業であり、授業の雰囲気を非常勤の先生が創り出しているといってもよい。各学科においても多くの非常勤の先生方にかかわっていただいていると思う。大学の授業改善としてどのように具体化していくかが次の大きなステップではないか。

最後に、糸魚川学長から「座席指定制」に関するご提言をいただいた。座席指定制は私語対策には有効かもしれないが、学生にとって、それはややもすれば教員サイドの高圧的な態度に映るかもしれない。よって、学生各人が自分の名札を携帯し、受講する際、それを自分の席に置くという方法（「名札制」）が代替案としてあることを紹介された。